

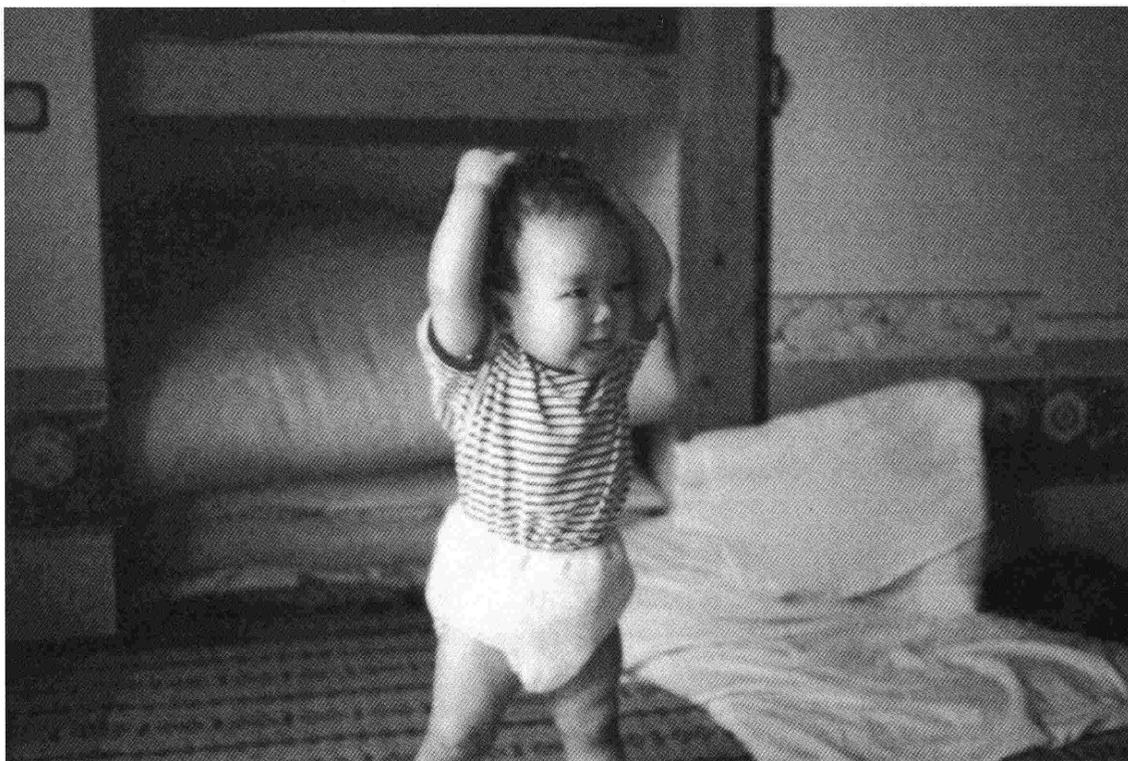
## 提 言

## 子どもを叱るということ

堤 裕幸 (札幌医科大学医学部小児科)

私もそうであるが、なかなか子どもを叱ることができない父親が増えているように思う。少子化で子どもを大切に！子どもの時代！と銘打って子どもを主人公にする風潮が強くなるなか、そのことだけでは子どものためにはならないことは明白である。私が父親に叱られた数少ない記憶がある。小学校低学年の頃、居間に散らかした物を父親から片付けるように言われ、テレビを見ていた私は、面倒臭そうに、お座なりに始末したところ、父はそれは何だと烈火の如く怒り、力一杯叩かれそうになった。体の大きな父親で、母親が身を挺して庇ってくれなければ、私は吹っ飛ばされていたように思う。普段、めったに怒らない父親の、あの形相は50年経った今でも覚えている。虫の居所が悪かっただけかもしれないが、家族が皆で使う場所は整理整頓することを教え、親に不貞腐れた態度を取ったことを手厳しく叱った。いけない事に対するの本気の叱咤であればこそであろう、今は有り難く、そして懐かしく思い出す。心から褒め、長所を生かす育て方が推奨されるが、それには適切な叱咤が伴う必要がある。私の長男は既に成人し、このような機会も持てなかったことを今は反省している。

先日のNHKのニュースである。学校で子どもが石を投げたり、掃除をサボったことに対し、担任が強く注意し、腕を引っ張ったりしたことで、担任が教育の一環であれ、やり過ぎであったことを認めたという。詳細は私には不明である。体罰ではないようであるが精神的に傷ついたのかもしれない。しかし、石を投げたり掃除をサボるのは良くないことで、注意されて当たり前である。注意の仕方に問題があったのかもしれないが、少なくともNHKが教師を指弾するニュースとして、当たり前のように流す内容であろうか？叱るということの意味合いや価値が、社会全体で変わってしまったようである。これが子どもたちのためになるとは思えない。大人が皆で十分に考える必要がある。



あたま トントン♪